◆　八王子都税事務所長賞　◆

「税は昔も今も」

東京都立南多摩中等教育学校　３年　長谷川　如音

私の一番好きな教科は歴史だ。この歴史という教科では昔の人がどのように暮らしていたか、や昔どんな人がどんな政治を行っていたか、などを知ることができ、それがこの教科の魅力だと思う。そんな中、どの時代でも「税」に関して言及されていることに気がついた。

中国の歴史書「魏志倭人伝」には卑弥呼が治めていた邪馬台国にはすでに税が存在していた、との記述がある。邪馬台国では税として米などの食べ物が納められていたといわれている。この税は国の運営や占いのときに使われていたようだ。これが日本で最古の税だといわれている。

飛鳥時代から鎌倉時代までは「租、調、庸」の税が納められていた。「租」とは米の収穫量の三パーセントを納めるもので、凶作時の非常食として各地に貯蔵されていた。「調」は成人男性にのみかけられた特産品を納めるもの、「庸」は布を納めるものだ。これらは中央や地方の財源として使われていたそうだ。また、「租、調、庸」に加えて「雑徭」という税があった。これは堤防や道路の建設を地方の住民が行うものだった。

室町時代から江戸時代は税の中心が「年貢」で江戸時代には一定期間同じ量を納める「定免法」から毎年収穫量を調査して決める「検見法」に変わった。この「年貢」は領主の生活費、兵士の給料、軍事費、道路や橋の建設などに使われていた。

明治時代になると税の制度は大きく変化した。安定した財源を得るために収穫量に左右される米ではなく、お金で納められるようになった。特に「地租改正」によって「地租」という地価の三パーセントを納めるという税があった。これらの税は軍隊の近代化のための軍事費、学校設立のための教育費、交通インフラや行政機関の整備に使われた。

現在、国に納める税金を「国税」と呼び、その中には「所得税」「法人税」「消費税」などの種類がある。これらは年金や子育て支援、医療などに使われている。また、都道府県や市区町村に納めている税を「地方税」と呼び、その中には「住民税」「事業税」などがある。これらは教育や福祉、消防、救急、ごみ処理などに使われている。

このように税金は古代から今現在に至るまで私たちが生きるために欠かせない大切なことに使われ続けている。そして、同時にその私たちが生きるために欠かせないことは国民一人ひとりがお金を貯めたとしてもほとんどできないことだと思う。そんな一人ではできないことも税金を国民みんなから集めれば行うことができる。私は近い将来、税金を納める「納税者」という立場になる。その時に自分が納める税金は一人ではできない大きなことに使われることを自覚し、誇りを持って税金を納めたいと思う。